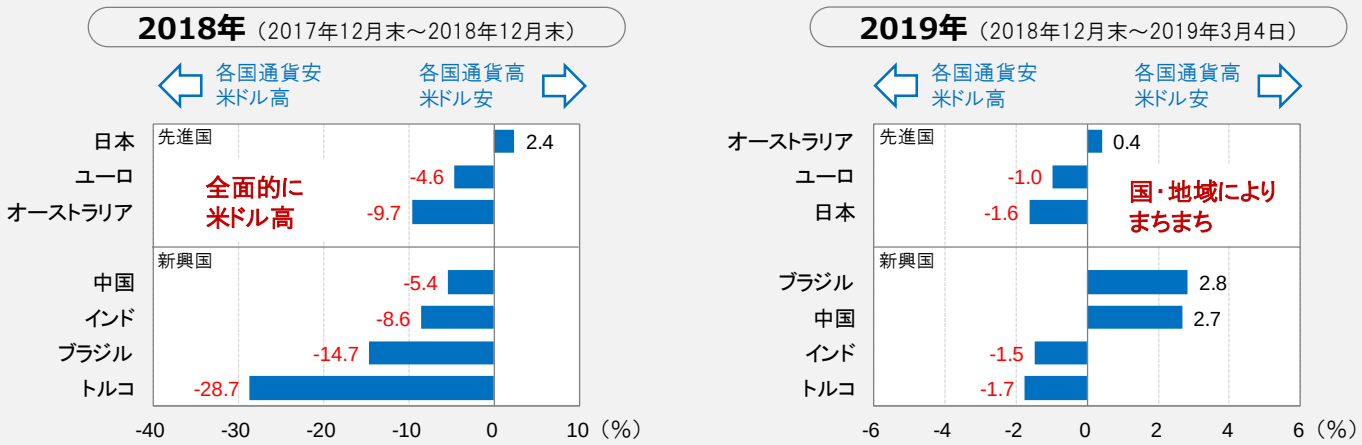
2018年と様相が異なる2019年の米ドル相場

FRB議長の米利上げ打ち止め示唆から、米ドル高局面は転換点を迎えた可能性

- 米連邦準備制度理事会(FRB)は2018年に政策金利*を4回、「1.25-1.5%」から「2.25-2.5%」へ引き上げました。米金利上昇を背景に米ドルの相対的な魅力が高まり、2018年は日本円を除き全面的にドル高となりました(左図)。
- しかし、2018年11月にパウエルFRB議長が今後の利上げ打ち止めを示唆して以降、米ドル高局面は転換点を迎えつつあります。2019年の対米ドル相場は国・地域によりまちまちの動きとなり、選別的な動きが進行しています(右図)。

＊フェデラル・ファンド金利の誘導目標レンジ

【主要国通貨の騰落率(対米ドル)】

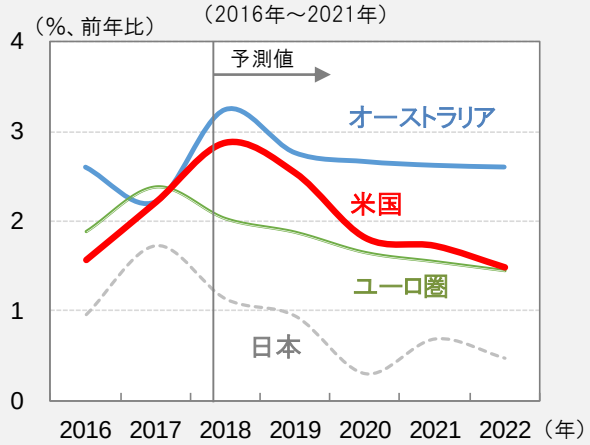


(出所)ブルームバーグ

利上げ打ち止め示唆の背景は経済減速懸念、市場は追加利上げなしを見込む

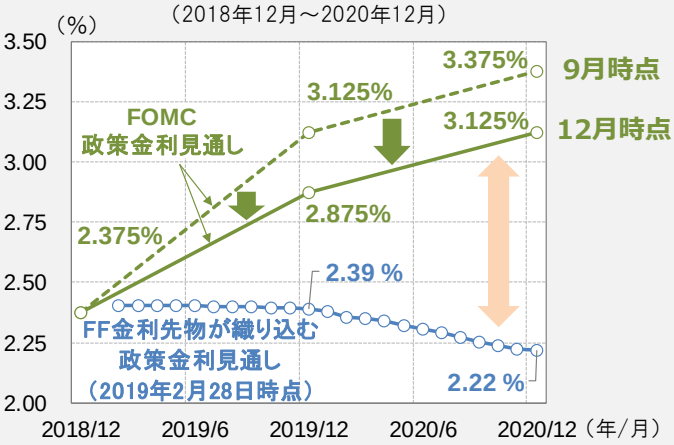
- FRBが利上げ打ち止めを示唆した背景には、減速が予測されている米国経済に対する配慮があると考えられます。IMFによると、米国の実質GDP成長率は2018年の+2.9%から、2019年は+2.5%、2020年は+1.8%と減速が予測されています(左図)。
- 2018年12月時点のFOMCの見通しでは、2019年の追加利上げは「2回」と見込んでいます。これは、2018年9月時点の「3回」から1回引き下げ、利上げペースを緩める姿勢を示したことを意味しています。一方、足元のFF金利先物をみると1回の追加利上げも織り込んでおらず、市場は2020年に向けての利下げの可能性も視野に入れ始めています(右図)。

【先進国の実質GDP成長率】



(出所)ファクトセット
※2018年以降はIMFによる予測値

【FF金利先物とFOMC政策金利見通し】



(出所)米連邦公開市場委員会(FOMC)、ブルームバーグ
※FOMC参加者の政策金利見通しは中央値

●当資料は、説明資料としてレッグ・メイソン・アセット・マネジメント株式会社(以下「当社」)が作成した資料です。●当資料は、当社が各種データに基づいて作成したものですが、その情報の確実性、完結性を保証するものではありません。●当資料に記載された過去の成績は、将来の成績を予測あるいは保証するものではありません。また記載されている見解、目標等は、将来の成果を保証するものではなく、また予告なく変更されることがあります。●この書面及びここに記載された情報・商品に関する権利は当社に帰属します。したがって、当社の書面による同意なくして、その全部もしくは一部を複製し又その他の方法で配布することはご遠慮ください。●当資料は情報提供を目的としてのみ作成されたもので、証券の売買の勧誘を目的としたものではありません。